Katzensteg Frau Sorge

Herm. Sudermann

作 ンマルデウズ

人夫愁憂・橋猫

譯 月春田生
郎三信谷池

版出社潮新

昭和五年五月十五日印刷
昭和五年六月一日發行

飜譯者　生田春月
　　池谷信三郎
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込（長）八〇五番
八八〇六番
八八〇七番
八八〇八番
振替東京　二三、四五〇番

第二期
世界文學全集（10）
猫橋・憂愁夫人
第一回配本

非賣品

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

解說

ズウデルマンに就いて

ヘルマン・ズウデルマンは、一八五七年九月三十日、東普魯西のハイデクルウク區のマツィーケンに生れた。『猫橋』などにもよく現れてゐるやうに、その地は獨逸の東北端で、獨逸人とスラヴ人——即ちリスアニア人（リタウエン人）との混棲してゐる土地である。然し、ズウデルマンはスラヴ人との血緣はない。彼の家は和蘭のメンノニトの後裔で、十七世紀の宗教詩人ダニエル・ズウデルマンもその家系から出たといふ事である。

彼の家はその地方の名望家で、彼の父はその村の麥酒釀造所を所有してゐたが、事業上の失敗のために、一家は零落して、ズウデルマンは十四歲のとき、實科學校を中途退學して、藥劑師の徒弟にならねばならなかつた。かうして幼時から憂愁夫人に見舞はれて、つぶさに生活の辛酸を嘗めたが、その後やうやく再び學業を續ける事が出來、ティルジットのギムナジウムを卒業して、更にケエニッヒスベルクの大學に入つて、文學と歷史とを學び、一八七七年伯林に出て、續けて同地の大學に通つたが、自活の必要上から、當時、パウル・ハイゼ、フリイドリッヒ・シュピイルハアゲンと共に、小說界の三星であつた富豪ハンス・フォン・ホップフェンの家庭教師となつて收入を得ると共に、傍ら新聞雜誌に小說を寄稿してゐたが、未だ世の注目を惹くに足りなかつた。

一八八七年、『憂愁夫人』を出すに及んで、最初の成功が彼を見舞つた。その前年に、彼は既に短篇集『薄明』を出してゐたが、この『憂愁夫人』によつて、彼の小說作家としての地位を確立する事が出來たのである。然し、ズウデ

ルマンが眞にその大名をなして、ハウプトマンと雁行する作家として、獨逸の文壇に雄飛するの素地を得たのは、その戯曲の第一作『名譽』(但、この前既に青年時代に『幸福の娘』なる作があるといふ)のためである。この作が、一八九〇年、丁度、ハウプトマンの『日の出前』が自由劇場で上演された五週間ばかりの後、レッシング座に上演せられるや、異常な大成功を博した事は、文學史上有名な事件である。

當時、次ぎのやうな噂が行はれてゐた。ズウデルマンが、小説で相當の成功を示したので、友人達が彼に勸めて、今度は舞臺の道に進んではどうかと云つた。が、彼はそれをことわつて、「小説だつたら、わづかの間に書き上げられる自信があるが、戯曲だとさうは行かない。長い間の勞作に從つて、それから、やつと書き上げて、劇場主事の間をたのみ廻つても、採用されるかどうかも覺束ない。よしまた採用されたにしても、今度は上演の成功が、長い間の勞作と期待とを酬いてくれるかどうか問題だから」と云つた。そこで、友人の幾人かが(その中には、一九一二年巴里で死んだユスティッラアトのミハエリスもゐた)八百マルクの金を出し合つて、この金でズウデルマンに、生活の心配なしに戯曲の勞作に從はせる事にした。若し成功しなかつた場合には、損失となるわけであるが、若しまた成功した場合には、その出資者に、興行料の半額を提供するといふ約束であつた。そこで、彼が執筆をはじめた戯曲が『名譽』で、しかもそれはあらゆる時代を通じての最大の成功した上演の一つとなつたといふのである。

これは一九一二年頃、新聞に載つた逸話として、マックス・ガイスレルの傳へてゐるところである。眞僞は保證しがたいが、とにかく、『名譽』の成功はすばらしいもので、その後、ズウデルマンが專ら戯曲の方面に力を傾倒するやうになつたのも、それがあづかつて力があるものと思はれる。然し、この戯曲家としての成功が作家としてのズウデルマンを茶毒したものである事は、殆んど文學批評家の定説となつてゐる。ズウデルマンはその初期に於て、ハウプト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マンと比較されると共に、多くの評家から貶黜されるのを常としてゐた。甚だしきは、彼は詩人ではなくして、製造家であるとさへ云はれた。激烈なズウデルマン攻擊者のアルフレット・ケルは、ズウデルマンはハウプトマンとは、その名前の最後の綴りのマン以外何等共通點を持つてゐないとまで云つてゐる。

元來、獨逸では通俗的に人氣を得た作家に對して、激烈な、殆んど狂的な攻擊を加へる風習があつて、多くの作家は甘んじてそれを堪へ忍ばねばならない。やゝ古くはパウル・ハイゼがさうであつた。『問題の人々』の作者シュピイルハアゲンがさうであつた。『イェルン・ウール』の作者フレンセンがさうであつた。ズウデルマンもその一人で、特に最も狂激に、最も長く多方面から攻擊された人である。かうした事例は必ずしも獨逸に限らず、文學者間の通有性で、我國に於ても、近年、さうした著しい例を目睹した事も二三に止まらないが、獨逸に於けるやうに、一册の書物の全面を擧げての辯難攻擊は、未だ曾てその例のない事である。

そして、かうした攻擊は、必ずや一部分は不正當であると同時に、一部分は正當であるのを常とする。ズウデルマンに於て特にさうである。ズウデルマンは屢々、俗衆に迎合するものとして、特に舞臺効果をねらふものとして非難せられる。一般に通俗性を多分に有する事によつて貶黜せられる。まことに、その作品は專ら普遍的問題を取扱ひ、誰にも容易に理解せられるから、多數の讀者と看客の喝采を博するに十分であるが、それだけ、深邃であると云ふ事は出來ないからである。ズウデルマンも極めて近代的な作家として、既成道德に對する反抗的なところを多分に示してはゐるが、然し、イプセンなどのやうに徹底的でなく、深刻でもない。とかく微溫的であり、宥恕的である。これが評家の不滿を買ふ大きな理由である。然し、ひとたびそのすぐれた技巧の點に至つては、たとひサルドウ、ジュマの亞流といふ酷評はあるにしても、また得易からざるもので、その激烈な敵でさへも認めなければならぬところである。

今、ズウデルマンの戯前までの作品を列擧すれば、左の如くである。

薄　　明（短篇集）（一八八七年）『無理のない話』と傍題す。『友達』、『新年の告白』等の諸作で、モオパッサン張りの、皮肉な厭世觀の出たものであるといふ。

憂　愁　夫　人（長篇小說）（一八八七年）作者の自傳の最も多く織り込まれたもの。小池秋草、相良守峰、池谷信三郎氏等の譯出づ。

同　　胞（中篇二種）（一八八八年）『靜かな水車場』、『願望』を收む。前者は馬場睦夫氏の譯あり。

名　　譽（戲曲）（一八八九年）

猫　　橋（長篇小說）（一八八九年）邦譯に戸張竹風氏の抄譯『賣國奴』、及び小宮豐隆氏の『罪』あり。

ソドムの末路（戲曲）（一八九一年）

ヨランテの結婚式（長篇小說）（一八九二年）

故　　鄉（戲曲）（一八九三年）「マグダ」として普ねく知られるもの。島村抱月氏、舟木重信氏、その他二三の人の譯あり。

過　　去（長篇小說）（一八九四年）ズウデルマン作中の最長篇で、またその最も圓熟した作である。『消えぬ過去』の名に於て、生田長江氏の譯あり。

胡　蝶　合　戰（喜劇）（一八九四年）

片隅の幸福（戲曲）（一八九六年）

死に獻げられしもの（一幕物集）（一八九六年）『テヤ』、『小フリッツ』、『永遠の男性』、そのうち『テヤ』は曾て何人

かによつて譯された事がある。

ヨハンネス　（史劇）（一八九八年）
三本の鷺の羽　（韻文劇）（一八九八年）
聖約翰祭の火　（戲曲）（一九〇〇年）
三講演集　（一九〇〇年）
生活萬歲　（戲曲）（一九〇二年）
劇評の粗暴化　（一九〇二年）
急進主義者ソクラテス　（戲曲）（一九〇三年）
石の下の石　（戲曲）（一九〇五年）
花の船　（戲曲）（一九〇五年）
薔薇　（一幕物集）（一九〇七年）『光帶』、『マルゴオ』、『最後の訪問』、『遠き王女』の四篇より成る。うち『マルゴオ』は森鴎外博士の譯があつたと思ふ。
雅歌　（長篇小說）（一九〇八年）久し振りに小說に歸つての作であるが、センセエションを起したに拘はらず、『猫橋』には遙かに及ばないと云はれる。
海邊の人々　（史劇）（一九〇九年）
シクラスの乞食　（韻文史劇）（一九一〇年）
印度の百合　（短篇集）（一九一一年）六篇の短篇を收む。一部分は一八八八年頃に書いたものであるが、『同胞』

や『薄明』の光彩はないといふ。

令　聞（戯曲）（一九一三年）

大戰後のズウデルマンの作は、戯曲に、一九一六年著した『神なき世』（『女友達』、『敷地』、『より高い生活』の三篇より成る）をはじめ、『ラッシュホフ家』、『獨逸の運命』（『聖なる時』、『犧牲』、『救ひを呼ぶ聲』の三篇）等があり、小説には、短篇集に『リスアニアの物語』及び『少年時代の畫帖』あり、長篇小説に『狂教授』、『シュテッフェン・トロムホルトの妻』などがある。『リスアニアの物語』と『少年時代の畫帖』とは、共に少年時代の記憶より材を取つた、愛すべき短篇集である。『狂教授』はビスマルク時代を背景とし、『シュテッフェン・トロムホルトの妻』は藝術家の結婚生活の三十年間を取扱つて、自由に渇望する藝術家が、戀愛のために結婚生活の中に引き入れられ、まもなくその生活を檻の如く感じ、自分と自分を愛する妻との生活を地獄にする、あの一般的な藝術家の結婚の問題を捉へて、作者の體驗を籠めて描いたもので、ズウデルマンの作中、最も自己告白的な要素の多いものだと云はれる。

しかも、ハウプトマンが老來ますゝたゆむ事なく精進の道を踏んで、その名聲を維持してゐるに比して、ズウデルマンの晩年はむしろ寂しいものであつた。彼の全盛期は、一八九〇年代にあつて、その後は壯年時の作品を凌ぐものをつひに書き得なかつた。彼は一九二八年十一月二十日、その名聲を生きのびて寂しく死んだ。

『猫橋』に就いて

『猫橋』の名は、隨分早くから我國に傳はつた。田山花袋氏の初期の作品、『重右衛門の最後』などに、既にその影響

が著しく現れてゐる事は、明治文學研究者の熟知せられるところであらうと思ふ。戸張竹風氏が、『賣國奴』と題してその抄譯を出されたのも、我國に自然主義の興起する以前の事であつたと覺えてゐる。また、戸張氏が『ニイチエと二詩人』と題して、そのニイチエ崇拜の立場から、ハウプトマンとズウデルマンとを紹介して、この二作家とニイチエとの關係を說かれたのも、その頃であつた。

ズウデルマンは、小說作家として、戲曲作家として以上に重要な意義を置かれてゐる。中には、戲曲作家としての才人ズウデルマンが、小說作家としての大才ズウデルマンを謀殺したと評する評家すらもある位だ。そして、ズウデルマンが後年衰頽を示したのは、小說の分野を棄てゝ、戲曲の方面に走つたからであるといふのは、少しくその作に親しんだものの、等しく首肯するところであらうと思ふ。そして、今一つ、その得意の鄕土を棄てゝ、都會生活に材を取るに至つたのも、またその徒勞を多くした所以であるといふのも、十分根據のある事である。

小說家としてのズウデルマンは、專ら、鄕土小說の作者である。鄕土小說に於ては、やゝおくれてフレンセンがその『イェルン・ウール』に異常な成功を收めたが、ズウデルマンの小說家としての成功も、專ら鄕土小說家としてである。『猫橋』も『憂愁夫人』も『靜かな水車場』も、共に彼の生地を舞臺として、その民俗氣風を巧みに描出して、著しい効果を擧げてゐる。

『猫橋』はいろんな意味で、刺戟の强い、緊張した、力强い作品である。ズウデルマンの小說構成術は驚嘆すべきものがあるが、その卓越した手腕が、『猫橋』に於て、遺憾なく發揮されてゐる。讀後の冷靜な批判はとにかく、その讀過するに當つては、作者の欲するが儘に、喘ぎ喘ぎ引きずつて行かれる外はない。恐らくこの小說が、二百版を重ねて、四十年後の今なほ絕えざる讀者を持つてゐる所以も、決して不思議ではない。

時はナポレオン戰爭の最中、東普魯西の邊陲シュランデンに於て、城主シュランデン男爵が、その母より傳へられた波蘭土の血の命ずるが儘に、波蘭土の獨立運動に對するナポレオンの約束を信賴してその軍に加擔し、猫橋の間道にこれを案内して、そこから普魯西軍の背後を衝かしめたがために、玆に城の周圍の村民の激昂と憎惡とを煽る事となつて、つひにその城は燒かれ、恐ろしい追放者の生活をしたあげく、自分もその反抗の中に斃れてしまふ。この賣國奴の汚名を着た父の大きな罪の重荷を背負はせられた主人公ボレスラアフは、父の罪を贖はんがために、自ら進んでナポレオンに對する自由戰爭に投じて、名譽の負傷をして歸鄕するが、彼の眞の贖ひはその後にあつた。

彼は父の罪惡の相續者として、またその憎惡と、その反抗と、その苦惱とを相續しなければならないのだ。彼の父の共棲者であり、その命によつて佛蘭西軍を猫橋に案内した共犯者である一少女レギイネに對して、彼は不思議な立場に置かれる。彼はレギイネを且つ忌み且つ恐れるに拘はらず、彼もまた共棲者たるべく强ひられ、その憎惡の分擔者たるべく强ひられる。かくて、槍と棒と呪詛とに對する必死の抗爭が生れ、天國のやうに罪深く、地獄のやうに淸淨な戀が芽ぐむ。

この野性的な、本能的な、そして犬のやうに忠實なレギイネの性格は、力强い創出である。彼女は自然兒である。人爲の道德に弱められない、本然の子である。因習や虛飾に囚はれないで、謂はば善惡の彼岸にあるのだ。この女の燃えるやうな純情に對するとき、これと對照的に點出せられた今一人の女ヘレエネは、いかに色褪めて、貧弱に見える事だらう。しかも、その無味な老孃を主人公が多年心の中に理想化して、聖母マリアの面影をこれに寓して、反つて純眞なレギイネを擯斥し、嫌忌するところに、この作の特別の効果が存する。そして、そのヘレエネへの幻滅の中には、大なるユウモアの發現があるが、レギイネを排斥しながら、いつとなく、だんだんこれに惹かれて行く主人公

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の心理的經過には、この作家の大なる天分を承認しないではゐられない。

ズウデルマンは深い思想家ではない。レギイネによつて暗示せられるその一種のニイチエヤニズムも、さして深いものとは思へない。然し、この因習道德への抗爭、人間の心中に深く植ゑ付けられた傳統的な善惡の觀念に對する徐々たる反逆の過程を、かくも力强く描出する事は、なかなか至難な業である。小說家は必ずしも深い思想家でなくもいい、と云ふより、寧ろ深い思想家である場合は、小說家として反つて往々失敗するといふ譯者の考へは、ズウデルマンのこの作などを見る時、一層强められるやうに思ふ。ズウデルマンはいかにも作家らしい作家だ。加藤武雄氏の所謂藝術小說と通俗小說との渾一境なども、ズウデルマンあたりに於いて、申分なく實現されてゐるやうな氣がする。

飜譯は精讀である。從つて、飜譯者は原作の缺點を最もよく知る事が出來る筈だ。譯者もこの作の弱點については、氣の付いた點も相當あるが、こゝではそれれわざと云はない事とする。多分、讀者もこの作の長所と同時に、氣付かれる事と思ふから、一にその判斷にまかせておく。その代り、ズウデルマンの激烈な反對者なるアルフレット・ケルの評言を少しばかり引用してみたい。

ケルはトリックがズウデルマンの特徵だと云ひ、そのトリックが、激烈な壓倒的な情熱の描寫によつて、性的に滿たされない女性の讀者を昂奮せしめる點に於て、特によく力を現はすと云ふ。『猫橋』でも、『靜かな水車場』でも、『過去』でも、此のおなじ特徵を持つてゐる。ボレスラアフがレギイネに對したのと同じやうに、ヨハンネスがトルウデに對する時でも、レオがフェリチタスに對する時でも、讀者を一度に、急激に、刺戟し、滿足せしめて、その興味を消失せしめるやうな事をしないで、最後まで滿を持して、その刺戟を永續せしめ、期待を煽つて、緊張を全篇に延長して、讀者を最後まで引つ張つて行く。讀者をして、いつ？　今？　と絕えず問はしめて、その昂奮狀態を緩和しない。ホ

レスラアフとレギイネを、荒廢した城の廢墟の寂しい一室に、床を並べて、長い幾夜も眠らせるやうな場合にも、その結合を妨害する或物を置いて、よくその緊張の氣分を把持する、そこにトリックがあると云ふ。然し、この三つの場合とも、その愉快な緊張を最後まで保つたと云つてゐるところに、たとひトリックと貶するとも、作者の手腕を認めざるを得なかつた事が分る。

拙譯は一九二八年版(二百十版)を底本として、ビアトリス・マアシャルの英譯、"Regina or the Sin of the Fathers."を參照し、また、小宮豐隆氏の『罪』をも參照した。小宮氏の譯からは、多大の教示を受けた。こゝに謹んで謝意を表しておく。なほまた、ヒイス・モダアン・ランゲエヂ・シリイズ中の抄出本をも參照して、そのノオツとグロッサリイとから尠からぬ便益を得た事をも玆に附記しておく。又、固有名詞中、英語讀みによつて我國に熟知せられてゐるものは、(例へばダイヤナ、プロシヤの如し)英語讀みに從ひ、他はなるべく原語の發音に準じた。主人公の父の名が、一ケ所ではハンス・エーベルハルトとあり、一ケ所ではエルンスト・エーベルハルトとあつたのは、作者の不注意と思はれたから、ハンスで一定した。(英譯も然り)又、ヘレエネの伯母の家はケエニッヒスベルクであるべきを、ワルテンシュタインとなつてゐるところがあつたが、これはわざとその儘にしておいた。

『靜かな水車場』に就いて

『靜かな水車場』は一八八八年に出した『同胞』中の一篇で、他の一篇『願望』とともに、同胞間の葛藤を主題としたものである。原題を全部譯すれば、『靜かな水車場の話』といふのであるが、この「靜かな」は、內容の示す如く、

「音なき」「ひつそりした」の意味で、むしろ「廢れた水車場」とでも譯せば、原意に最もよく添ふであらうと思ふが、『靜かな水車場』と直譯して、雅致を存せしめた方がいゝと思つたのである。

兄弟爭ひは、殊に、一人の女性に對する兄弟の戀は、歐羅巴の作品に屢々取扱はれるところで、例へばダンテの『神曲』中のフランチェスカの悲戀の如きもそれであるし、さきごろ菊池寛氏によつて譯出せられた英のホオル・ケエンの『放蕩息子』などもそれである。（我國でも、加藤武雄氏の『沈默の塔』、三上於菟吉氏の『激流』など、最近相當その例がある）が、ズウデルマンの一時代前の同國作家オットオ・ルウドヰッヒの『天地の間』など特に擧げる必要があるやうに思ふ。が、『天地の間』が、弟の妻に對する兄の橫戀慕を描いたのとは反對に、ズウデルマンのこの作は、兄の妻に對する弟の戀を描いてある。そして、『猫橋』が、父の情婦であつた女に對する本能の抑制のための必死の抗爭を描いたのに對して、これは兄の妻に對する戀慕から脫出せんがために破滅の中に突き進む弟の苦悶を描いた點で、好個の對照をなすものである。おなじく破倫に墮しやすい題材を捉へながら、ゾラなどのやうに獸性の底まで行くところなく、際どいところで食ひ止めてゐる。こゝに作者の嚴正な倫理的立場がはつきり出てゐると同時に、その通俗的な健全性が見えると云へようと思ふ。とにかく、この作の與へる印象が、倫理的、道義的である事は疑ひのないところである。

男女の三角關係は、最も人間的な問題として、永遠に小說の題材となつて續くであらうが、それが殊に兄弟間の場合には、問題は一層深刻味を加へてくる。此作にあつては、陰鬱寡默にして、次弟の不幸な死によつて激情を抑制すべく努力してゐる兄と、快活纖細にして、我儘ながらも道義心を失はない弟とを對立せしめて、その間に小鳥のやうな無邪氣な、愛らしい多感の一少女を配する。この女主人公トルウデの性格は、いきゝ〳〵と描き出されて、十分讀者

の同感を惹くに足るものがある。その情緒の發展の經路も、至極「無理なく」思はしめ、祭りの後の心ゆくばかりの夏の夜の夢など、羨むべき巧緻の筆と云はねばならぬ。むせるやうな芳烈な素馨の花の匂ひの中に、既に來るべき悲劇の匂ひを嗅ぐ事が出來、美しく哀しい水車場の娘の戀の歌が、悲しい人の身の上を占つて、空色の舞踏靴の痛みが、凄慘目も當てられぬ運命の破局となる迄、人間の止み難い生命の欲求と、運命の嚴しい審判とを描いて、「青春」と呼ばれる大きな罪の恐ろしさを强調したところに、ズウデルマンらしい特色は既に十分現れてゐる。極めてセンセエショナルな、殺人、放火などの著しい事件を好んで描くのは、卽ちズウデルマンのズウデルマンたる所以で、これを非難する評家もあるが、然し、それがひどく不自然に思はれなければ、それでいゝわけだ。粗雜な言ひ方をすれば、小說は面白くさへあればいゝとも云へるからだ。そして、ズウデルマンの小說は、たしかにどんな點から云つても、面白い小說である。近代の小說作家中、その點で彼は屈指の作家であらう。この『靜かな水車場』の小幅に於てさへ、これは十分に肯定せられる事だ。過褒すれば、小幅の間に、人間愛慾の全幅を擴げたと云へない事もなからう。但、我々がこの作品に敬服するものは、さうした點よりも、反つて期せずして現れてゐる鄕土色の巧みな描寫にあり、それが田園の鮮新な活畫たるところにある。

拙譯は一九二一年版（四十五版）を底本とした。邦譯としては紐育プレンタノ社發行の英譯本による馬場睦夫氏の譯が既に出てゐる。時間の餘裕がなかつたので、英譯を手に入れる事は出來なかつたが、馬場氏の譯を參照して、多くを敎へられた。同氏に謝意を表する。

『猫橋』も本篇も、原文を遠ざかる事なくして、出來得る限り平明ならん事を期して、相當苦心はしたが、所期の効果を收め得たかどうかは、隨分疑問である。大方の寬容を得ば幸甚である。（以上、生田春月）

『憂愁夫人』に就いて

ズウデルマンの事に就いては、別に解説があるので、こゝには簡單に、『憂愁夫人』に就いて述べて見る。

ズウデルマンの生れたのが一八五七年で、この作の發表になつたのが、一八八七年と云ふ事になつてゐるので、日本流に云へば、彼が卅一歳の時の作である。一八八九年に伯林のレッシング劇場で初演された彼の處女戯曲『名譽』と共に、ズウデルマンの華々しい作家生活の門出をなした作で、以來版を重ねる事無數、私がこの飜譯に使つたコータの一九二八年版は既に、二十八萬六千から二十九萬迄の版である。それ程この小説は獨逸人に愛讀されてゐるのである。彼の作の中でも、この作とそれに次ぐ『猫橋』は他の作から、嶄然頭角を現してゐる。

ハウプトマンは戯曲に、ズウデルマンは小説に、各々その特質を發揮してゐる。二人とも、獨逸自然主義の双璧である。自然主義の作とは云へ、そこには獨逸人獨特の一種の表徴があつて、この題名が既に、一つの表徴なのである。『フラウ・ゾルゲ』と云ふのは、彼の故郷の東プロシヤ地方の一つの傳説的存在であつて、日本で云ふ雪女郎とか何娘とか云ふやうな、さう云ふ妖魔のやうなもので、人世に、苦惱と愁ひを齎すものとされてゐる。

この小説には、主人公のパウルと云ふ青年が、その『フラウ・ゾルゲ』の呪ひと闘つて、零落した一家を挽回する苦惱と艱難に滿ちた、血の滲むやうな生活の記録が記されてゐる。

それは云ふ迄もなく、作家の苦しい體驗であり、同時に又、獨逸人の精神を現してゐる。大戰にあれだけの手ひどい痛手を受け乍ら、今日の輝ける復興獨逸を再建した根强い獨逸魂が、この小説の主人公パウルに依つて、はつきり

と代表されてゐるのである。

梗概を簡單に述べて見るとかうである。

主人公パウルの生れた時、彼の家屋敷は丁度、競賣に附せられようとしてゐた。

或る十一月のうら悲しい日の事、彼等の一家は住み慣れた家を離れ、哀れにも荒れ果てた、貧しい農家に引移つて行つた。灰色の霧に包まれた野原の中を、細い小雨に濡れ乍ら、彼等を乘せた馬車が走つて行つた。そしてその所々壁のくづれ落ちたみじめな農家。――そこがパウルの生ひ立つた家であり、同時に、彼の半生の勞苦と努力の捧げられた場所であつたのだ。

何事にも無計算で、たゞ氣位が高く、誇大妄想で、この零落した一家の中に暴君のやうに振舞つてゐる父親。優しい心を懷き乍らも、永の年月の苦惱に虐げられ、すつかり氣力を失つて了つたか弱き母親。悧巧で、利己的で、たゞ一身の事のみに心をつかつてゐる二人の兄。放縱なわが儘な二人の妹。――それ等の中に、パウルはあらゆる自我を殺して働き通した。

彼はあらゆるものを犧牲にした。

己れの青春も、青春の夢である戀までも。

かくて彼は、內氣で陰氣な、あらゆる明るさ華やかさから見離され、しよつちゆうおど〳〵物におびえてゐるやうな、暗い青年に生長して行つた。運命は常に彼に辛かつた。

父の浪費、兄や妹の世話、火事、それ等のあらゆる艱難と彼は鬪ひ續けて來た。その間にも彼は常に、誤解され、罵られ、輕蔑され通して來た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com